

豊かな未来をつくることばの学び

〈全体会〉「哲学と言葉——自然、自由という言葉をとおして」

- 講演：内山節（哲学者）
- 進行：島崎英夫（大阪府高等学校国語研究会理事長
大阪府立清水谷高等学校校長）

〈第一分科会〉内山節氏の作品を読む

- 進行：田中啓介（大阪府立岸和田高等学校教諭）
鈴木寿（大阪府指導教諭 大阪府立箕面高等学校）
- 協力：森木乃美（奈良女子大学）
ファサービ円アリーダ（奈良女子大学）



内山節氏近影

二〇一五年七月二十四日、大阪府高等学校国語研究会・大阪府立今宮高等学校の共催で、「大阪国語教育アセンブリー2015」が開催されました。全体会では、哲学者の内山節氏による講演があり、それを受け、第一分科会では、「内山節氏の作品を読む」と題して研究協議が行われました。教員に加えて、学生や一般の方も含めた多様な参加者が、活発に意見を交わしました。

全体会

内山節さんは、一九五〇年、東京、世田谷生まれ。学生時代は理系科目が得意で、国語の成績はよくなかったそうです。高校生で哲学を志すも、大学で教えているような哲学には反発を覚えて進学せず、山中の釣りに熱中する日々の中で、文章を書き始めます。

論理的に説明できないこと

書き始めると、なぜ大学の哲学ではいけないのか、ということが、わかり始めました。当時、哲学はすべて論理で書いていくものだと当たり前のようにいわれていましたが、僕には反発がありました。論理で語っていきけることは論理で語っていけばよいが、論理で語ることがすべてではない、という思いがありました。

例えば、ガリレオ以来、地球は丸いということが真実となりました。しかし、日々私たちが歩いたり、呼吸をしたり、空を見上げたりしている、この地球というものは、ホットケーキのような地球であり、天動説の地球です。地動説が科学的真実だということに間違いはありません。しかしだからといって、天動説的な

地球というものが存在することを否定してしまうのはまずいんじゃないか。どちらも真実といってかまわない。これは、つまり、どの視点から見ているか、という問題なんです。論理的に説明できる世界もあるけれども、論理的に説明できない世界というものもたくさんあるということです。

特に哲学は、「人間はなぜ生まれてきたのか」とか、「なぜ死を迎えなければいけないのか」とか、「生きることに何か意味があるのか」とか、そういうことをいってもどこかで問いかける一面を持っています。しかし、これらの質問に対して、ほとんどすべて、論理的に答えるすべはありません。

結局、人間が生まれ、生きていく、そして死ぬということも含めて、わからないことだらけなんです。そういう世界の中で、私たちは生きて、日々を暮らしている。論理的に説明できないことがたくさんある。しかし一方、論理的に説明できるところは説明していく必要がある。そういった全体の折り合いのつけ方を、さちつと考えていかなければいけないんじゃないかと思っています。

僕の高校時代の頃の哲学だと、この「論理的に説明できないこともある」という考え方を認めない傾向があつて、だから大学で学ぶことに反発を覚えていたのかな。と、あとから気づきました。

自然と人の結び合い

「自然」という言葉を取りあげてみます。「自然」は、明治三〇年頃に、英語であれば nature という語を、どう日本語に翻訳するのかがという時に、苦肉の策として使われるようになったものです。「自然」という言葉自体は昔からありました。もともとは中国語で、中

国漢語という形で日本に入ってきた。ただしそれは「ジネン」と読まれています。「自然」を訓読すると「おのづからしかり」となるように、元は「おのづから」という意味なんです。それが鎌倉期ぐらいから、ぼつぼつ「シゼン」と読んで、「突然」という意味で使う用例が増えてくる。同じ語が、どうして「おのづから」「突然」という別の意味で使われているのか。これには理由があります。

例えば今、「突然」雷が落ちて、豪雨になったとします。そうすると私たちは、どうして今雨が降らななきゃいけないのか、雷が落ちなきゃいけないのかを、まるで知らない、そのために、「いきなり」降ってきた、「突然」降ってきたと感ずる。ところが、実は雷が落ちるのも、雨が降るのも、何らかの「おのづから」の理由があるわけで、その「おのづから」の理由を知っていれば——例えば、朝、天気予報を見ていて、昼過ぎには大気の状態がこうなるから…などということがわかっていけば、それは「おのづから」の雷雨ということになる。昔の人たちというのは、すべてのことは「おのづから」の理由がある、しかし、その「おのづから」の理由がわからないから、「突然」と感ずる、そういうふうを考えていた。「突然」でも、理由がわかかってしまえば「おのづから」となるので、「突然」と「おのづから」はそう遠い意味ではない、ということになるのです。

それに加えて、「自然」の「自」にも「おのづから」と「みずから」という二つの読み方があります。なぜかというところ、やはり「おのづから」と「みずから」はそう遠くなかったからなんです。昔の人からすると、「おのづから」がわかってこそ、「みずから」がある、という捉え方なんです。昔の圧倒的多数は農民でした。農業をやっていると、「おのづから」が、つまり、

ものごとの理由がよくわかってくる。いきなり「みずから」農業計画を作ってもだめです。例えば、今年は一月に田植えをして、五月に稲刈りしよう、なんて、いくら計画をしても、そんなものは成り立つはずがない。田植え・稲刈りをする季節というのが、「おのづから」あるわけで、その頃にするのが一番いいわけです。「おのづから」田植えの季節が来たから、「みずから」田植えをするんであって、「みずから」の田植えは、「おのづから」の摂理に従っているわけです。

今、現代人の感覚では、自分で一方的にやるのが「みずから」だ、というところがありますが、昔の人の感覚からすると、「おのづから」がわかって、それから、これが自分の仕事だ、と考えて「みずから」取り組むというように、連続した一つのものなのです。だから、「自」には二つの読みがある。それが現代社会では、「おのづから」と「みずから」の意味が完全にわかれてしまったから、どっちがどっちかわかるようにしなければならなくなつて、しようがないから送り仮名を変えようという話になってくる。でも、もともとは、そんなふうに分けなくてもいいものだったのです。

今、英語の *nature* の意味で使われている「自然」という単語を、もともと日本語は持っていない「自然」という人がいるのと同じように、あの山があつたり、あの森があつたり、あるいは、あの狐きつねがあつたり…。そういう世界だったわけで、あつちが自然、こつちが人間という区分法・分離法がなかった。自然の世界も人間の世界もすべてが結び合いの中に存在していると考えていた。目に見えない結び合いがたくさんあって、近くにいる人とはもちろん、遠く離れている人ともどこかで結び合っているし、自然もまた結び合っていて、人間と自然も結び合っている。そういう結び合いの世界

に私たちは生きていて、それを壊してしまうことは、絶対にやってはいけないことだった。

なのに、向こうが自然、こつちが人間という二分法になってしまった。さらにいえば、人間どうしもどこかで結び合っていたものが、現代社会では、一人ひとり、バラバラの個人として捉えるようになってきた。すると、古来、結び合う世界を感じながら生き、時には文学という形で語ってきた、あの世界が、わからなくなってしまうことになる。本当は、私たちが今生きている世界の中にも、古典文学とどこかでつながる世界がまだあるんです。でも、それが見えない。

今は「自然」という言葉ができたがために、私たちの見える世界が変わってしまった。その言葉を使ってしまったがために、心の奥の方で見えている世界に、気づけなくなってしまうんです。



全体会での講演の様子

「自由」が生んだ課題

「自由」という言葉もそうで、日本語でいう「自由」は、もともとそんないい意味ではなく、勝手気ままという意味に近かった。それが明治になってきて、これも外国語の翻訳に利用されました。もともとヨーロッパには、自由の権利、自由のための義務という考え方があります。これは、自由の権利というのは神が与えるもの、それを手にしたかったら、神への義務を果たす必要がある、という、キリスト教社会の発想に基づく考えです。それが近代になって、神の世界を外して社会学論として一般化されました。

ヨーロッパの思考というのはやはり、キリスト教の影響を強く受けています。先ほど述べた自由の権利、自由のための義務という考え方もそうですし、それから、人間の出发点は個人だという考え方もそうです。キリスト教では、人間の命というのは神が吹き込むことによって発生したものですから、すべての人間は神の前の個人です。だから、その個人は神の前に立たなければいけないし、神に対して義務を果たさなければいけない。そうやって初めて、神は権利を与えてくれるという、そういう論理構造になっている。その論理に基づいて、人間の単位を個人で捉えるという発想が、近代社会の原理にもなっていくわけです。

でも今、実はこういう問題を読み直さなければいけない時代が来ています。それが二〇世紀後半の哲学の一つの課題になっています。

例えば、現在起こっているいろんな問題は、近代社会ができあがっておらず、途上のままであるから生じてくるのだ、という考え方があります。「自由」「平等」という近代的な理念自体は正しかったけれども、

それらがまだ完成されず、実現していないものがたくさんあるから、そこを推し進めていくことに私たちの責任がある、という考え方です。以前はこれが一貫した捉え方でした。しかし、リオタール^{注1}は、この捉え方自体が間違っている、といいます。そうではなく、近代の理念が実現したために、この世界はこのザマなんだという(笑)。また、レヴィ・ストロース^{注2}は、「フランス革命は巨大な敗北の始まりである」といいます。一七八九年の革命において、自由・平等・友愛という理念を掲げて以降、近代の理念を提示した国として、フランスは、世界の中で特別な地位を占めることになった。しかし、そのフランス革命の理念こそが、世界を破壊させたのだ、と。

今、私たちに「自由な社会」がないから問題なのではなくて、「自由な社会」を作ったがゆえに、たえずそこから自由を抹殺したり、つまらない管理をしようとしたり、といった問題が至る所から発生してくる。それはある意味、「自由な社会」の一つの帰結と捉えることもできる。すると、この「自由」の理念自体に何か欠陥はなかったのか、という問題意識も、どこかで持たざるを得なくなってきました。

日本における自由観

では日本においては「自由」というものをどう捉えていたか、ということに立ち返ると、先ほど述べたように、もともと日本語の「自由」は勝手気ままという、どちらかというと悪い意味で使われていました。むしろ

る日本語の中では、「自在」という言葉の方が重要だった。「自在」というのは、たえず自分を問う言葉なんです。

例えば、「自在な農民になりたい」といえば、「あなたにその能力があるんですか、そのための技は持っているんですか」と自分で問わざるを得ない。その能力とは、「おのずから」結び合っている世界のことをよく知っていて、だからこそ、その世界の中で「自在」に生きていくことができる、という力のことです。「自在な農民」というのは、どういものが結び合っている作物を生み出しているのか、どこを手助けすればいい作物ができるのかをよく知っている。「おのずから」の世界の中で、「おのずから」の結び合いを理解することによって、「自在」さを獲得していくという、こういう一種の自由観が日本古来のものだった。決して個人が自由というのではないのです。あくまでも、その結び合いの中でそれぞれが自由であるということであって、だから、どういう結び合いが自由を作っていくのか、その「おのずから」の結び合いをたえず考える必要があるのです。

ただ、その「おのずから」の結び合いというのは、その場所・その時によって違いますから、その時その時、それを掴まなければならぬ、という厄介な問題が生れます。マニュアルを見れば書いてある、というわけにはいかないんです。それを掴めるかどうかは、体で知っているとか、命自体が知っているとか、言葉にならないけど知っているという、「暗黙知」の世界に近くなってきました。

(注1) ジャン・リオタール・リオタール…一九二四年～一九九八年。フランスの哲学者。

(注2) クロード・レヴィ・ストロース…一九〇八年～二〇〇九年。フランスの社会人類学者、民俗学者。

言葉にできない世界

こういうことを考えていくと、私たちは言葉というものを持つことによつて、たいへん便利になった反面、意識の世界だけでコミュニケーションが行われるようになってしまつて、言葉にできない世界がわからなくなるという不便を背負うようになったといえます。言葉があるから思考ができる、というのは事実ですから、別にそれを否定しなくてもいい。しかし、言葉があるために思考が妨げられてしまう部分もあるわけで、人間の思考というのはこの矛盾を抱えながら行われているんだということを、心に留めておく必要があると思います。そして、その「意識された思考」と「無意識の思考」という両者をうまくつないでいくには、一つずつの個体で認識するのではなくて、どういう結び合ひの中にその個体はあるのかを注視しなければならぬ。どういふ結び合ひの中で個体が成立しているのかを考えていく時に、言語で語れる世界と語れない世界の両面が見えてくる気がします。

日本語、日本文化の見直し

すると、こういう世界を哲学はどういふふうに取り込んでいけるか、ということが、一つの課題として現れてきます。この課題を考える時に、実は日本語というのはいへん有利な言葉であることに気づきます。日本語は、いわゆる、「行間」で語る」ことができる。つまり、言葉の羅列で語るだけではなくて、言葉の「間」といいますか、その隙間をうまく使うことによつて、語っていないんだけれども、「わかるでしょ」と伝えてしまふことができる。その極限が、短歌や俳

句です。

日本語には、文法的にはあいまいな部分もあつたりするわけです。しかし、行間とか、言葉と言葉の間とか、そういう中に、語り得ぬものを語らせるということ、それを大事にしている言語であるために、文法としてはヨーロッパ言語ほど整合性がなくてもかまわない。そういう意味で、僕としては、日本語で物を書くということにこだわりたいのです。

すべて論理で書き切ろうとすると、日本語は不便です。コミュニケーションの場合もそうで、すべて論理で押し切ろうとしたら、きちんとしたコミュニケーションにはならない。自然とのコミュニケーションとすればなおさら、こつちが論理でいつても向こうは論理でいつてくれませんから、成り立たない。しかし、非論理的な形で何かが通じ合う、ということがはあり得る。それは本当に、体が知っていると、命が知っていると、かいつく次元なんだろうと思ひます。

そして、こういう世界を今、哲学は何とか取り込んでいこうとしている。

同時に、日本語という言語の世界もまた、脚光を浴びています。例えば今フランスで、多くの人が日本のマンガを読んでいたりと、「カワイイ」「禪」などの言葉がそのまま用いられていたりする。そこにあるのも、言葉の意味を超えた奥行きみたいなもので、そこに、彼らの感じてゐる日本文化というのがあつて、それを「いいな」と思つてゐる若者たちもじわじわ増えてきてゐる。

そういう時代に私たちはいるんだということを考えながら、これからの「国語」についての考え方も、少しずつ変わつていつてくれればいいなと、僕自身は思ひます。

学校教育は必要か

学校教育というものが、現に今、こういう形で行われているわけですが、それを少しでもよくしていくための努力が必要です。そして、その一方において、「学校教育つて要るんだらうか？」という問いかけも、実は必要である。これは両方真実といつてもよい。

明治になつて、日本は急激な近代化を遂げましたが、それを担つた多くの部分は、学校を出ずに工場を作つて働いていた人たちでした。おそらくせいぜい寺子屋で学んだぐらいのものだと思ひます。戦後の日本の高度成長を一九五〇年代後半から担つた人たちも、高学歴の人ではなく、戦前の高等小学校卒だったり、戦後の中学校卒だったりする。そういう人たちが、昔ながらの礎にしがみつくとではなく、新しいことをどんどん取り入れて、例えば新しい図面も使つていくし、場合によつては英語で書かれた図面なんかも手に入れて、それを必死になつて読んで：：ということに挑戦してきた。この力つて何だつたんだらうか。

私たちは、今ある制度の中で、この社会を少しでもよくしていかなくてははいけません、その反面、果たしてこの教育制度つて必要なんだらうか、という逆側の問いかけがなされなければいけない。その両者がたえずぶつかり合ひながら進んでいく必要がある、そう思つてゐます。これはたぶん、教育だけじゃなくしてすべてのことについていえる、そういう時代なんじゃないかな、という気がしてゐます。

第一分科会

第一分科会では、内山節さんにも同席いただき、内山さんの文章を学んだ高校生・大学生のパネラーとともに考えました。パネラーは、内山さんの文章から、どのようなことを感じ、思い、そして、どのような疑問を持ったか、発表し、また、フロアの参加者も意見を述べ、そのやりとりの中で考えを深めていきました。

パネラーの意見

- ・現在の^{上野村}は、内山さんが入った当初から見ると、どのように変わってきたか。
- ・内山さんは、教科書掲載の評論「自然と人間の関係」とおして考える」の中で、近代と自然を対立関係として捉えているように思える。現代を生きる私たちはどのように過ごすべきなのか。
- ・都会の高校から自然を見ることはできない。電車に乗る、時間に追われている、それは私たちにとって当たり前のこと。そんな中でどう生きればいいのか。
- ・内山さんは「時間」というキーワードを使われるが、私たちは「時間をいかに合理的に使うか」に追われている。それは無理もないのでは。今の暮らしを変えられることはできない。
- ・内山さんのように物事を深く考えるにはどのような切り口（アイデア）が必要なのか。普段どのようなことを考えているのか。

（注3）群馬県多野郡にある村。内山氏は長年、上野村と東京とを行き来している。

・内山さんは、最期を迎えるならどこがいいか。都会の病院？ 自然に囲まれた村？

フロアの意見

- ・大阪で暮らす人間にとっては、今の都会での生活こそが当たり前。それでも内山さんのように自由な発想を持ちつつ、楽しみながら暮らしていくために必要なものとは何か。
- ・「世の中には論理的に説明できることと説明できないことがある」とおっしゃっていたが、内山さんのもう一つのキーワードである「関係」という言葉は、説明できるのだろうか。
- ・「忙しい時間」を知っているからこそ「ゆっくりと過ごす」「ゆたかな時間」という発想が出てきて、語れることがあるのかもしれない。

教科書に載っている内山さんの評論は、時間・労働・余暇をキーワードに、二項対立を提示し、その上で「豊かさとは何か」を問いかけるものが多いのですが、高校生・大学生たちにとっては、切り口の新鮮さを感じつつ、実感がわきにくいという様子も見受けられ、率直な疑問が投げかけられました。フロアからは、パネラーの意見を受けた意見や、内山さんの発言をもとに展開した意見が出るなど、非常に活発な交流の場となりました。

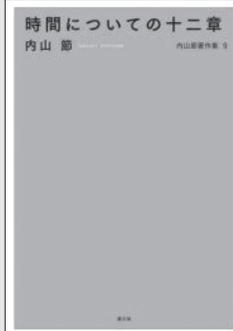
内山さんの回答

●行き詰まったら、長いスパンでものを考えてみる、というのも重要です。今われわれは、近代以降を生きていますが、その中にいる人間には、今が当たり

書籍紹介

『内山節著作集』…二〇一四年から翌年にかけ刊行。全十五巻。大学に進学せず山里での生活経験をもとに思索を深めてきた著者の、研究の集大成。自然や人間の相互の関係がどのような世界を作り出しているのかということに着目し、時間論・存在論・労働論などの分野で、独自の思想を展開する。書影は、第九巻『時間についての十二章』。

内山節
『内山節著作集』全15巻



農山漁村文化協会

前です。その中にいるままで考えることは難しい。しかし、「昔はどうだったのか」と考えてみると、この近代以降という時代が、人類の歴史の中で非常に「異常」な時代であることに気づきます。人間はずっと「何かと結ばれながら」生きてきた。しかし今、われわれは、非常に不思議な生き方をしています。一度、近代社会というものを整理する必要がある。整理した上で、「今」における解決策を考える。整理するためには、対立構造で考えてみる必要があります。と思います。

●「nature || 自然」は、わかりにくい言葉です。「家庭の中の自然」などいいますが、それは「深い山の自然」と同等なのか、基準は何なのか。曖昧な言葉ですが、それでいいと思います。例えば、いろんな人たちが、田舎との関係を作り直そうとし始めていますが、やり方は千差万別。田舎に引っ越して農業を始めたり、農民を助けたり。上野村も一面で

は、昔と比べて変わってきました。でも、一面では変わっていない。木切れを使った地域電力をやっているのですが、形を見ると新しい、でも、見方を変えれば、地元の薪を使ってエネルギーにしてきた伝統への回帰ともいえます。昔にただ戻すわけじゃない。新しい技術を使って、地域循環型社会を作っていく。しかし、自然と人間が結ばれているという考え方は、全然変わっていません。こう考えなければならぬ、ということはありません。ただ、「こんな考えがあるんだ」というのを知ることが大事です。田舎に「住まなければならぬ」のではありません。それでは、価値判断の押しつけになります。

●先のことを考えると、どんどん蟻地獄に入り込んでしまいます。だから、「三日以上先のことを考えない」。その先どうなるかは「考えない」。なるようになる。最期の時も、だから、「なるようになる」と思います。死ぬ時に死ぬ場所死ぬ。もし、自分の意志を口にできる状態なら、その時は、上野村を選ぶだろうし、森の中ではなく、たぶん、自分の家を選ぶでしょう。また、人間の考え方は変わる可能性もある。私は五十年ぐらい病院に行っていない。でも永遠に行かないといっているわけではない。私には「大きな病気がわからなくてもいいんですか」と聞かれますが、人はどうせ、いつか死ぬ。その時は、死ぬだけ。そう思っています。

●私は、人間という生き物に価値があるとは思っていません。少なくとも、自然にいる生き物たちよりも価値がある、とは思わない。動物たちは、社会全体を悪くしてしまうことはない。でも、人間が社会全体を悪くすることはよくあるし、みんなが善意でやっていることが、気がついたら、世の中を悪くしていることもあります。そういった点では、他の動物

よりも価値がないともいえます。人間が生きていることには意味がないどころか、マイナスかもしれない。そんな思いをどこかで持ちながら、でも、できることをする。今の時代は、人間に価値を置きすぎている。でも、ひよつとしたら、その一人ひとりが、社会を悪くしているかもしれない。そこは「わからない」「わからない」ことには謙虚であるべきなのに、「価値があります」と断言してしまったりするのは。また例えば、時間を「有効に使わなくちゃいけない」といいます。みんなが「有効に使わない」と思い始めたらどうなるか。文化がなくなります。文化は無駄から生まれるから。だから、今の時代には、ろくな文化が生まれてこない。効率のいい社会はできているかもしれないが、文化のない社会になっています。それでは、意味がないのではないですか。

●一方からだけ考えるのではなく、「そういうのもあり、かも」と思いながら、生きる。私たちはこの社会で生きてるから、無理をしないで体制に順応しておくのもいい、そう考えるのも、あり、です。でも、違う生き方があるってことを知っておくのもいい。何かを手に入れようとすると、何かを捨てることになる。これを知っておくことも大切です。「大学行かない」って決めたら、色んなものが手に入る。勉強に向けていた時間を費やせるんですから。「大学に行く」ことを反対してるわけじゃない、でも、それは、別の何かを捨てることでもある。捨ててもいい。でも、リスクもある。常に何が捨てられるか考える。それが、新しいものを手に入れるために大切なことです。

●ちよつとでも好奇心が湧いたら、とにかく手を出してみる。そのことによって、次の好奇心が出てきま

す。この好奇心は、一つの無駄かもしれませんが、でも、その無駄な好奇心の積み上げによって、何かを見つけてくれるのです。「合理的な理解は、便利な理解ではあるが、深い理解ではない」という言葉があります。合理的な理解しかないなら、そこから文化は生まれません。深い理解、その無駄の中から、文化は生まれます。そして、その深さの中には、「説明できない関係性」というものがあると思います。しかしそれもまた、考え続けていく中で、わかっていくような気がします。

内山節さんを囲み、高校生・大学生・教員・社会人といった、さまざまな人たちが集まり、「考えるきっかけ」を生み出す場が生まれました。お互いの「関係」の中で、すばらしい時間がつくり出されていきました。

(記録：大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎教諭 能登 敦子)

*「大阪国語教育アセンブリー」は、二〇一六年も七月末に開催予定です。六月に「大阪国語教育アセンブリー」ブログ等で詳細をお知らせします。

(https://www.osaka-c.ed.jp/blog/inamiya_asm/)

編集部よりお知らせ

数研出版の改訂版『国語総合現代文編』『高等学校国語総合』教科書(平成二十九年年度)には、内山先生の「時間と自由の関係について」(『自由論―自然と人間のゆらぎの中で』岩波書店、一九九八年 所収)を採録しています。是非、あわせてお読みください。